

ドイツ語授業におけるひとつの試み

ー 〈ドイツ語学習〉の〈映画〉から〈映画〉の〈ドイツ語学習〉へー

人文学部 佐藤 信行

Ein Versuch im Deutschunterricht für die allgemeine Bildung

Nobuyuki SATO (Faculty of Humanities)

Ich habe bisher schon häufig audiovisuelle Materialien für den Deutschunterricht im ersten und zweiten Studienjahr benutzt. Ich halte es für sehr wichtig, Studenten zu motivieren, um eine aktivere Teilnahme am Unterricht erzielen zu können. Ich habe den Eindruck, daß Studenten beim Filmesehen mehr sprechen und lebhafter diskutieren können als gewöhnlich.

Diesmal haben wir versucht, mit Hilfe des Filmes nicht nur die Landeskunde sondern hauptsächlich die deutsche Sprache zu lernen. Der Bericht hier bezieht sich auch auf die Wichtigkeit der methodologischen Untersuchungen im filmorientierten Deutschunterricht. Dafür ist unter anderem das Angebot eines ausgezeichneten Filmbuches unentbehrlich.

Schlüsselwort: Motivation, Teilnahme, Filmesehen, Deutschlernen, Methodologie, Filmbuch

はじめに

1997年度の〈中級ドイツ語〉における〈映画〉を中心とした授業の試みについて報告したいと思う。何故〈映画〉なのか。

私はこれまで(1988年度以降)比較的多く〈視聴覚〉教材(BBC、NHK製作のドイツ語・ビデオ教材、特集番組、映画など)を初級・中級(93年度までは甲・乙)ドイツ語の授業に取り入れてきたほうであると思う。それは時に主たる学習テキストであり、時にドイツの生活・文化(の一端)紹介の一助であったが、なかでも、ドイツ語学習に先だって〈テーマ〉を設定した(例えば〈ベルリン〉88,94、〈M.ディートリヒ〉89、〈ヒトラーとチャップリン〉90、〈T.マン〉92)ドイツ語授業(特に中級=乙)において〈映画〉(例えば『Mephistoメフィスト』『Der Blaue Engel 嘆きの天使』『The Great Dictator 独裁者』『Morte a Venezia ベニスに死す』など)は重要な映像資料・教材であった。映画鑑賞のあとの感想や議論が予想と予定の時間を、つまり既成の授業枠を越えて活発化する

ことの多かったという体験がそのおそらく最も大きな理由であろう。

経 過

この授業の〈テキスト〉は映画『Der Himmel über Berlin』(邦題『ベルリン・天使の詩』、Wim Wenders監督、1987)と、その詳細なFilmbuch(詩人Peter Handkeとの共同脚本)である。授業回数は前期のみの14回で、〈クラス〉は人文・教育学部学生18名と工・理・法学部学生若干名から成り、使用教室はG313(第2LL)であった。授業の目標として「ナレーターになって映画の背後に流れる詩を朗読したり、またあるシーンにおける登場人物となって演じること」(講義概要)を掲げた。

まず初回到映画全体を鑑賞し、以後毎回の授業は、前もって私が用意したシーンごとにおよそ次のような手順で進めていった。

○そのシーンをビデオで見る(〈映像テキスト〉としての読みを含む)。

○あらかじめダビングしたカセットテープであらためて音声だけを聴く（学生たちにはダビングして繰り返し聴けるようにした）。

○〈文字テキスト〉を読む（比較的易しいところから選ぶようにし、内容が学習上、またストーリー展開上しだいに高まっていくように心がけた）。

○暗誦文をできる限り台詞として言えるようにする。

○そして最後に自らが役を担って演じる。

結果として選び出した9つのシーンについて、暗誦文、構文・文法上の要点、授業回数を以下のようにまとめておく。

1. 「詩（童歌）」の第1聯～第4聯を含む4つのシーン（第4聯は5. のシーンに含まれる、3回）。

（第1聯より）

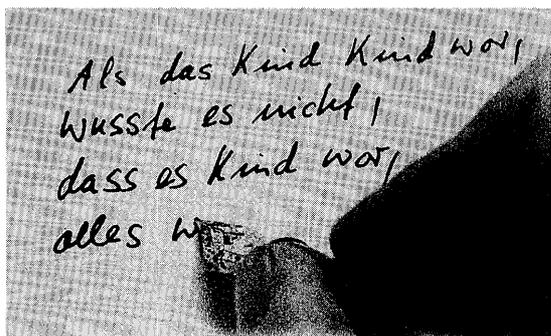
Als das Kind Kind war,/hatte es von nichts eine Meinung,/hatte keine Gewohnheit,/saß oft im Schneidersitz./lief aus dem Sand,/hatte eine Wirbel im Haar/und machte kein Gesicht beim Fotografieren.（動詞の過去形）

（第2聯より）

Ist, was ich sehe und höre und rieche,/nicht bloß der Schein/einer Welt?/Gibt es tatsächlich das Böse/und Leute, die wirklich die Bösen sind?/Wie kann es sein, daß ich, der Ich bin,/bevor ich wurde, nicht war/und das einmal ich,/der Ich bin, nicht mehr der,/der Ich bin, sein werde.（接続詞、関係代名詞、定形後置）

（第3聯より）

Als das Kind Kind war,/.../stellte es sich klar ein Paradies vor,/und kann es jetzt höchstens ahnen, konnte es sich ein/Nichts nicht denken,/und schaudert heute davor.（分離動詞、再帰動詞）



詩の第1聯を読む天使（ダミエル）の声とともに、紙に詩を書いていく手の〈映像〉（詩の朗読はつねに天使ダミエルが行う）

2. 国立図書館で物思いに沈みながら書物に見入っていた老人（詩人ホメロス）がそこを出て、ベルリンの壁沿いにポツダム広場へと歩みながら（天使カシエルが寄り添う）、この境界の賑わいとその後の悲惨な歴史を想い、いつか平和の叙事詩を語ることに希望を託すシーン（詩人の内面の声）（2回）。

Soll ich jetzt aufgeben? Wenn ich/aufgebe, dann wird die.../Menschheit ihren Erzähler verlieren. Und hat die/Menschheit einmal ihren Erzähler verloren, so hat sie/auch ihre Kindschaft verloren.（話法の助動詞、現在完了形）

Ich kann den Potsdamer Platz nicht finden! Nein, ich/meine, hier...Das kann er doch nicht sein! Denn am/Potsdamer Platz, da war doch das Café Josti...（話法の助動詞）

3. 天使カシエルとダミエルが散歩しながら人類史を語り合う叙事詩的なシーン（それぞれのモノローグに近いダイアログ）（2回）。

Erinnerst du dich, wie eines Morgens.../...der/Zweibeiner, unser lang erwartetes Ebenbild, trat,/und wie sein erstes Wort ein Ausruf war? Hieß es/"Ach" oder "Ah", oder "Oh", oder war es einfach/nur ein Stöhnen?/.../...und/vom Rufen seines Nachfolgers haben wir zu sprechen/gelernt.（再帰動詞、冠飾句、現在完了形）

Ich bin schließlich lang genug draußen gewesen, lang/genug abwesend,/lang genug aus der Welt!/Hinein in die Weltgeschichte!

4. ダミエルがカシエルにいつか人間となる日のことと、その自分の姿を希望として語るシーン（ふたりは監視塔の見える東ベルリンの無人地帯を壁に沿って散歩する）（1回）。

Jedem werde ich bekannt vorkommen, und

nieman-/dem verdächtig. Kein Wort werde ich sprechen und jede Sprache verstehen. Das wird mein erster Tag/sein. (未来・推量形)

5. 天使ダミエルが人間界の住民となる感動的なシーン(「詩(童歌)」第4聯を含む、1回)。

Das freut mich, daß es heute so gut geht./
Danke./ (ruft) Schön! (esの用法)

(第4聯より)

Als das Kind Kind war, /.../ hatte es auf jedem Berg die Sehnsucht nach dem im-/mer höheren Berg/und in jeder Stadt die Sehnsucht nach der noch grö-/βeren Stadt, /.../ wartete es auf den ersten Schnee und wartet so immer/noch. (形容詞の比較変化)

6. クライマックスであるダミエルとマリオンの出会いの場面、ひとがひととなることのできる、かけがえのない他者をお互いに見いだす、愛の詩ともいべきシーン(マリオンの語り)(2回)。

Einsam war ich nie, weder allein noch mit jemandem/anderen. Aber ich wäre gern endlich einsam gewesen./Einsamkeit heißt ja: Ich bin endlich ganz./Jetzt kann ich das sagen, denn ich bin heute endlich/einsam. (接続法)

Wir zwei sind jetzt mehr als nur zwei./Wir verkörpern etwas./.../...Es gibt/keine größere Geschichte als die von uns beiden, von/Mann und Frau. Es wird eine Geschichte von Riesen/sein, unsichtbaren, übertragbaren, eine Geschichte/neuer Stammeltern. Schau, meine Augen! (形容詞の比較変化、命令法)

7. 〈他者〉を見だし〈人間〉となったダミエルの激しい告白と、詩人ホメロスの新たな出発に向けての内面の声(1回)。

Erst das Staunen/über uns zwei, /das Staunen/über den Mann und die Frau/hat mich zum Menschen gemacht.

Nennt mir die Männer und Frauen und Kinder,

die/mich suchen werden, /mich, ihren Erzähler, Vorsänger und Tonangeber, weil/sie mich brauchen, wie sonst/nichts auf der Welt. (命令法)

総括

自ら〈演ずる〉という当初の目的はきわめて不十分にしか達成できなかったことを反省するとき、ひとつには〈語彙・文法・構文〉に関する説明・解説によって前もってもっと準備され、授業時にいわゆる〈訳読〉に相当する部分をより少なくすべきであったであろう。また映画・映像分析など他分野に関連すること(これはまたそれなりの研究を要する)にもっと時間を割く必要があったであろう。

学生たちの主だった感想(「映画なのでは思ったが、むずかしかった」「台詞によってストーリーがダイナミックに展開するという形ではない」「言葉や映像がわりと独立している」「ドイツ語が非常に詩的だ」など)に表れているように、私たちがふつうに抱く映画イメージからのずれがあったことは確かであるが、〈映画〉を教材とする授業については方法論がさらに検討されなければならないであろう。

様々な不完全と不十分にもかかわらず、この映画のもつ素晴らしい特徴には迫ることができたかもしれない——天使たちの優しい眼差しがベルリンの荒廃した〈現在〉に(1989年の壁崩壊以前の東西ベルリンが舞台となっている)注がれ、美しい詩と映像と音が一体となった映像詩によって見事に表現されている——と云うるとすれば、それを可能にしたのは間違いなく映画監督Wim Wendersと詩人Peter Handkeの共同作業から生まれた優れたFilmbuchの存在である。

おわりに

この試みになにか意義があるとするれば、〈映画〉をただドイツ語学習に付随する、社会的・文化的背景を理解するための方法のひとつとしてではなく、〈映画〉そのものを授業のメインに据えたこと、またその結果、映像と音声(台詞〔ドイツ語、フランス語、英語、ヘブライ語、トルコ語、日本語など〕、音楽、雑音など)、

映像と歴史（爆撃による死者たちの記録フィルムなど）、映像と演技など、多様な脈絡の中に〈ドイツ語学習〉を置いて、実践できたことではないだろうか。こうして授業が、ささやかではあれ、言葉の魅力を多面的に理解する方向へと開かれたように思われる。

〔付 記〕

成績評価は〈授業への参加度〉（出席回数）と、

〈筆記試験〉の結果に応じて優良可に相当する三段階の点数を与えた。

〔補 足〕

1980年代の〈ドイツ語授業〉をめぐる様々な試行錯誤と問題点については拙稿「ドイツ語授業論——経験と表象と言葉——」（『新潟大学教養部研究紀要』第23集、1992）参照。